

形容詞化接尾辞「じ」の意味と起源について： 「じ」は格助詞か形容詞活用語尾か

板橋, 義三
九州大学比較社会文化研究院日本社会文化専攻・日本語教育講座

<https://doi.org/10.15017/8648>

出版情報：比較社会文化. 8, pp.83-87, 2002-03-01. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

形容詞化接尾辞「じ」の意味と起源について

—「じ」は格助詞か形容詞活用語尾か—

“The Meanings and Origins of the Adjectival Suffix ‘ji’”
— Is the Old Japanese ‘zi’ a Case Suffix or an Adjectival Inflectional Ending? —

板橋 義三*

キーワード：形容詞化接尾辞，同一化，音変化規則，活用

序論

接辞「じ」特に「じもの」について比較言語学の立場から議論した論文は村山(1988)が最初であり、その後は全く存在しない。この村山の解釈は正しいであろうかという疑問が発端になり、その意味に対する異なった解釈が可能であるかどうか、またその意味がどのようにして発生してきたのか、その起源に迫るのが拙論の論旨である。この「じ」に対して、まずこれまで国語学ではどのように扱われてきたかを述べ、次にその論旨に対しての私見を述べ、最後に村山説に対しての判断を示したい。

[1] 先行研究

一般的に「じもの」「じく」「じき」に関する論文は全くなく辞典にのみそれが記されている。以下代表的なものを挙げ説明する。

大野晋は岩波古語辞典(1981: 641)で「じもの」には他の「らしい、ようすだ」と解される接尾辞、「らし」、「めき」と共通して2つの異なる意味を有するとしている。それはひとつは「別物なのに、あたかもそれらしい感じ、様子だ」という意味であり、もうひとつは「事物が本当にそれらしい感じ、様子をしている」という意味であるという。形態的には「じ」はシク活用形容詞の語尾「し」と同根とし、「もの」は「物」であるとしている。

前者(本来それとは違うものであるが、あたかも～のような格好で)の例:

(人々は)鴨じものの水に浮きゐて… (万葉集50)

後者(本当にそのものらしい格好で)の例:

(妻が死に)わき挟み児の泣くごとに男じものの負ひみ抱きみ… (万葉集481)

澤渦久孝は万葉集注釈I(1982-1984: 337)において「鴨じもの…」の「じ」を「時じ…」の「じ」と同様に「時ならぬ」というような否定の意味をもち「似て非なるもの」を示すとした。

北原保雄、久保田淳、林大らは日本国語大辞典:三省堂(2001: 1060)において単に「じもの」を形態的には形容詞語尾「じ」と形式名詞「もの」が連結し、それが名詞に接尾して「～であるもの(として)、～のようなもの」という意味になるとしている。

村山七郎(1988: 28-31)は「じ」には2つの異なる意味があり、ひとつは/ji/<*n+*si<*ni(否定辞)+si(「す」動詞)からの発展形(否定の意味を持つもの)であり、もうひとつは/ji/という接辞に *mo₂no₂<*(o₂)mo₂no₂<*o₂mo₂nno₂(「同じく・等しく」)<*o₂mo₂n+*to₂<*əmun(「1」)+*tə(接辞)という全く異なったもの(同一性の意味を持つもの)からの変化形と捉えている。ここで問題となっているのは後者の用法(同一化)であり、これは形態的にも意味的にもツングース語族の比較を表す/ji+/əmunə/(「と等しく、同一に」などの意味をもつ)からなる接辞と比較できるとしている。この説については以下に詳しく検討する。

[2] 「じ」の意味的分類とその機能

これまで述べてきた「じ」を含む「じもの」「じく」「じき」について実際にその例文を見ていこう。例文の引用は次の通りである。

* 日本社会文化専攻・日本語教育講座

「じもの」：万葉集：50, 210, 213, 481, 886, 1019, 2580,

宣命：6, 14, 日本書紀歌謡：95,

「じく」：万葉集：26, 4280, 宣命：25

「じき」：万葉集：26, 宣命：25

(1) 「じもの」の形式をとるもの：

例1. さわく御民も家忘れ身もたな知らず、鴨じもの（自物）水に浮きゐて（万50）

「入り乱れて働く民も家も自分も全く忘れて鴨のように水に浮いていて」

例2. 白たへの天ひれ隠り鳥じもの（自物）朝立ちいまして（万210=213）

「白い頭巾に身を隠して鳥のように朝発っていかれて」

例3. 緑児の乞ひ泣くごとに取り与ふる物しなければ男じもの（自物）腋挟みもち（万210=213）

「幼児が何か欲しがって泣くごと^に取って与える物がないから、男なのに（あるべき姿でない男、つまり女のように）子どもを脇にかかえて」

例4. 脇挟む児の泣くごと^に男じもの（自毛能）負ひみ抱きみ（万481）

「脇にかかえている子どもが泣くごと^に男なのに（あるべき姿でない男、つまり女のように）背負ってみたり抱いてみたり」

例5. 草手折り柴取り敷きて床じもの（自母能）うち臥い伏して思いつつ（万886）

「草を手折り、柴を取って敷いて床のようにしてその上に倒れ伏して泣き伏して思うには」

例6. 犬じもの（時母能）道に伏してや命過ぎなむ（万886）

「犬のように道に倒れて命を終えることであろうか」

例7. 馬じもの（自物）縄取りつけ鹿猪じもの（自物）弓矢囲みて（万1019）

「馬のように縄をつけ、鹿や猪のように弓矢で囲み」

例8. 面形の忘れてあらばあづきなく男じもの（土物）や恋ひつつをらむ（万580）

「顔形を忘れていられるのなら男なのに（あるべき姿でない男、つまり女のように）恋に苦しんでいられようか」

例9. 辱みはづかしみ思ほしまして我が皇太上天皇の大前に恐こじもの（土物）進退ひはらばい廻ほり（宣6）

「面目なくはづかしいと思ひ召されて我が皇太上天皇の御前に恐まって（恐れいった状態）進み這い回るようにして」

例10. 御命を畏じもの（自物）受け賜りまして（宣14）

「大命を畏って（畏った状態）お受け取りになり」

例11. 青によし奈良の狭間に獣じもの（式暮能）水漬く辺隠り（歌95）

「奈良山の谷間に鹿のように水に漬かったところに隠

れ葬られ」

(2) 「じく」の形式をとるもの：

例1. 耳我の山に時じく（自久）そ雪は降るとふ（万26）

「耳我の山にいつも（時と同じように）雪が降っていたという」

例2. 磯城島の人是我じく（自久）いはひて待たむ（万4280）

「大和の人たちは私と同じように物忌をしてお待ちするでしょう」

例3. この家じく（自久）も（宣25）

「この家と同じように」

(3) 「じき」の形式をとるもの：

例1. その雪の時じき（不時）がごと（万26）：「じき」は表意のみ

「その雪がたえず（時と同じように）降るように」

例2. 主じき（自岐）人の門よりは（宣25）

「主なる（主と同じような）人の家門からは」

「じもの」に関しては従来、用法が二つあげられている。（cf. 大野他1981：641）

(1) 別物であるにもかかわらず、それらしい感じまたは様子を示す

(2) 物事がそれらしい感じまたは様子を示す

この二つはその区別自体があまり判然としないが、実際には対象が何かによって使い分けられると見る。これは基本概念が両者とも全く同じであり、「その対象がある他の対象のある特徴をとりあげ、その点が共通しているように話者が把握し述べること」を表している。

上記の例文では5, 9, 10がその対象となるものが物質または状態形容詞から派生した抽象物であり、その場合には「その物質のもつ状態になって」と言う意味になるが、ただし、対をなしているような「男」が対象である場合には、「男」の特性ではなく、その反対の「女」の特性を表す。その他の場合は「～のように」というように「その生物の特性に同一化する」と言う意味になる。この違いはその対象（「じもの」の直前に位置する名詞（類））の特性またはその一部に話者が同一化する性質・状態と見なすと、すべてその表面的な違いを解消することができる。

次に「じく」「じき」の例からも分かるように、この「一く」「一き」はシク形容詞の活用の一部であると考えられるが、「一く」の場合は副詞的用法（連用形）であり、「一き」の場合には修飾用法（連体形）と動名詞化用法である。「時」を取る例文では「じく」「じき」が「時はなく」と一般に解釈されている。即ち、これは「時」という概念に無関係と考えているのであるが、「時という流れ」の進行状態（即ち、「常に」）に同一化しているとも考えることができる。つまり、この例の場合にも「同一化」は可能であるということである。

ある。「じもの」の用法で異なる点は「じき」のような連体修飾・動名詞化の用法を持たない点、即ち、「じもの」は活用しないという点である。逆に共通点は「じく」という副詞的用法が「じもの」の用法と全く同じであることである。

これらの共通点と相違点から、共通の形態素である「じ」は「ある対象（主語）に対してその他の対象のある特徴・性質といったものに同一化する」という意味をもつと考えられる。これは例えば、言語形式「A=B」といった場合、「Aという対象がBという対象の特性・性質をもつ、またはBという状態になる」という意味を表すが、「Aという対象がBという対象の特性・性質、または状態に同一化する」と言い換えることができることから「じ」は形容詞活用語尾「し」と同根である蓋然性が高い。

[3] 母音結合の側面からの「じもの」の分析

村山説における母音接触による音変化を見るため、まず音変化類型を考えてみる。

一般に古代日本語において二つの形態素の母音が連続するような場合には次の三つのタイプのどれかを取ることになる。（大野 1977: 190; cf. 岸田 1998）

【1】一方の母音が脱落する。原則として前項の語末母音が脱落する。

(a) 前項の語末母音が脱落する場合：

- ama+o₂ri>amo₂ri 「天降り」
- asa+ake₂>asake₂ 「朝明け」
- waga+iFe₁>wagiFe₁ 「自分の家」
- ara+umi₁>arumi₁ 「荒海」
- waga+imo>wagimo 「我妹」
- kureno₂+awi>kurenawi 「紅」

(b) 後項の語頭母音が脱落する場合：

後項の語頭母音が前項の形態素の語末母音よりも高母音である場合に限り後項の語頭母音が脱落することがある。

- waga+iFe₁>wagaFe₁ 「自分の家」
- imoga+iFe₁>imogaFe₁ 「妻の家」

【2】母音が融合して別の母音に転じる。

- ① i+a>e: saki+ari->sakeri 「咲けり」
uki+aku->ukeku 「憂けく」
- ② a+i>e₂: taka+iti->take₂ti 「高市」
naga+iki->nage₂ki 「長息」
- ③ u+a>o: kazu+aFe₂->kazoFe₂ 「数へ」
tudu+aFe₂->tudoFe₂ 「つどへ」

このほかに次のような融合があったとしている（大野 1977: 200-1）。

- ④ o₂+i>i₂: Fo₂+i>Fi₂ 「火一火」
ko₂+i>ki₂ 「木(立)一木」
yo₂ko₂+i>yo₂ki₂ 「横一避き」
- ⑤ u₂+i>i₂: tuku₂+i>tuki₂ 「月(夜)一月」
kamu₂+i>kami₂ 「神(代)一神」
tu₂ku₂su₂+i>tu₂ki₂ 「尽くす一尽き」
- ⑥ i+o>e: woti+omo>wotemo 「遠面」

【3】子音/-s-/を挿入する。

- Faru+ame₂>Farusame₂ 「春雨」
- aFu+awani>aFusawani 「あふさわに」

村山説を上記の音変化規則との関連で見てもよい。上記【1】、【2】、【3】のどれか一つまたは一つ以上の音変化が前古代日本語あるいは日本祖語に起こったと仮定した場合を考えてみよう。【1】の場合は前項の形態素の語末母音が脱落し、後項の語頭母音が残存する形式が一般的であり、（後接の語頭母音の脱落は後項の形態素の語頭母音が前項の形態素の語末母音よりも高母音（「聞こえ」が高いともいえる）である場合に限り後項の形態素の語頭母音が脱落することがある）これをそのまま適用すると、村山のいうような/o₂mo₂no₂/の語頭の/o₂-/が脱落するのではなく、/zi/の/i-/が脱落することになるため、/zo₂mo₂no₂/となるはずであるが、実際は後項の語頭母音が脱落して/zimo₂no₂/となっている。即ち、その場合には村山のいう*/o₂mo₂no₂/の語頭の/o₂-/は日本祖語または前古代日本語には存在しなかった可能性がある。つまり、これは本来/zi/+ /mo₂no₂/であったとも考えられる。従ってその場合その本来の形態(/zi/+ /mo₂no₂/)と意味（「と同様に」）が村山の言う形態(* /ji/+ * /əmun-tə /> /ji/+ /o₂mo₂no₂ /> /ji/+ /o₂mo₂nno₂ /> /ji/+ /o₂mo₂no₂ /)と意味（造格+「1」:「に等しく、と同じで」）とは相いれないため、ツングース諸語との比較も不可能となってくるものと考えられる。【2】、【3】の場合は音的環境条件が全く異なるため、村山説を説明することは不可能である。

即ち、上記のいずれかの音変化が前古代日本語あるいは日本祖語に古代日本語と同様に起こったと仮定した場合、母音の隣接が起こる場合には上記のどれかが当てはまることになると考えられるが、【1】(a)(b)のどちらの場合とも村山説とは実際には合致しないし、【2】、【3】は無関係である。従って、(1)「上記の音変化規則【1】(a)(b)が前古代日本語あるいは日本祖語の時期にも同様に起こったと仮定する」ことが誤りなのかまたは(2)「村山の言うような母音を語頭にした「もの」の祖語形が存在しなかっただけでなく、その後の音変化も起こらなかった」ためなのか、どちらかということになる。上記(1)と(2)の仮定は互いに相反するものであり、これまでの論議だけではどちらが事実かは充分判定できないので、下記の意味・機能・形態の

面からさらに議論を進める。

しかしながら、村山説のツングース諸語との関わりに関しては次のことが言える。村山説は日本語の内的構築から復元されたのではなく、あくまでもツングース諸語の形態的特徴に基づいて復元されたものである。その変化過程は推測にしかすぎない。その点は証拠としては挙げるべきでないだけでなく、(a) 日本語がツングース諸語と同系である、(b) この問題になっている「じもの」についてもツングース諸語のそれと同源である、(c) その変化過程も事実である、という前提で論議している点で、上記(1)の仮説よりもさらに弱い仮説である。よって、この論証により村山の唱える日本祖語形とその後の音変化についてはその蓋然性はかなり低くなったと見る。従って、暫定的に音的環境と母音の連続における変化と意味から考えると、現時点では村山説は単に可能性の一つとして、それも非常に弱い仮説として存在すると結論付けることしかできない。

[4] 音変化・意味・形態の側面からの「じ」の分析

OJ/zi/の本来の形態はどのようなものであったのかは全くこれまで追求されてこなかった。日本祖語においてはこの古代日本語の形式がそのまま存在していたかどうかは定かでないが、古代日本語の時代には既に化石化していたので、日本祖語における「じもの」の存在した蓋然性は非常に高いと考える。その祖語形を復元すれば、以下の二つがその候補として立て得ると見られる。その際、琉球古層や琉球方言に関する論文等¹⁾を調べたが、「じもの」またはそれに類似した形式(例えば「ジムヌ」など)は存在していないようである。

/ji/についての変化過程として次の2つが考えられる。

(1) PJ*n-si>OJ zi>MJ ji

(2) PJ*zi>OJ zi>MJ ji

まず上記(1)は大野(1974:641)がシク活用形容詞の語尾/si/と同根としている点も筆者は考慮し、さらに一般に有声の閉鎖音、摩擦音、歯擦音の一部は本来無声音に遡ると考える(例えば、他にはPJ/*n+*ka/<OJ/nga/など)という点までは可能であるが、上記のように形容詞語尾との関連を考えるのははなはだむずかしい。即ち、それは形態についてはMJ/ji/は本来OJ/zi/<PJ/*n/+*/si/であるとする、形容詞語尾OJ/-si/と同形であるが、機能・意味の点から見ると、このOJ/zi/は実際にはその直前の品詞は用言ではなく体言であることから、形容詞の語尾OJ/-si/とは異なると考えられるからである。それに対して(2)で

は本来の形態も古代日本語のものと同じであるとするが、これも可能であるとする。上述のように一部の有声の閉鎖音、摩擦音、歯擦音が本来無声音に遡るということは中には本来古代日本語と同形態をもつものもあると考えてよいから、上記のようにPJ*/zi/とする。OJ/zi/はほとんどの場合その直後に「もの」を伴って、副詞的意味を生じるが「—じく」「—じき」などのようにその直後に「—く」や「—き」を伴って形容詞の活用をするかのように振舞うものが幾例か見える。この形式(「じく」)は「じもの」と形態的にも意味・機能的にも同じものと考えられる。従って、形態的にはシク活用の形容詞語尾と同根とするのも可能であると思われる。この点は以下にさらに詳しく見る。

これは上記のように村山説で問題になるのは「じく」「じき」(「と同様に」の意味)が「じもの」とは統語的振舞いが異なる点もあるものの、その意味は全く同じであると言う点である。まずこの形態が同じ意味をもつに至った過程が説明されなければならないが、「じく」「じき」の「じ」の部分が「～の状態である」から「～と同一・同様である」という意味に派生したとするのは問題はないであろう。しかし、村山説では「じもの」の「もの」の部分から「同一・同様」という意味が派生したとしているため、問題である。さらに村山説では「じ」そのものが本来、格を示す接尾辞であり、それが「—く、—き」のように形容詞活用語尾のように変化しているものと考えられる要素と一体となるとは考えられない。逆に問題の「じ」が「おなじ」「おやじ」と同じ形容詞化の接辞の一部であると考え、と、「—く、—き」のように形容詞活用語尾と一体となり、形容詞の活用そのものを表すと考えることができ、「じ」と「く」、「じ」と「き」の結合は整合性がある。

上でも触れたが、この「じ」が形容詞の語尾「—し」の異形態または派生であると考え、と、「じ」には本来「～の状態で／にある」という意味を有し、それは「～と同じ状態で／にある」と言いかえることができると考える。「じ」でもって形容詞化することでその主語あるいは話者の「精神的同一性」を表現したのである。つまり、それがここで問題となっている「じ」そのものの意味「～と同じ(ような／に)」と合致してくるのである。

結 論

以上から「じもの」「じく」「じき」の「じ」は形容詞の活用語尾「し」と同根と考えていいであろう。即ち「じ」は「し」の異形態または派生と言え、ただし、異なっている点は「じ」の直前には名詞あるいは名詞類しかとらず、それを「じ」でもって形容詞化する機能をもつと考えられ

る。更にその直後に「もの」や「一く」「一き」を連結させ副詞的用法や動名詞化の用法を発達させたと思われる。

村山の「じもの」では「じ」（造格）と「もの」（物）に分析され、さらに「もの」が「物」ではなく「一」という意味のツングース系言語から継承していると説いているが、上記のように「じ」は「し」と同源であり、格助詞の「じ」としては考えにくいことが分かる。さらにこの「じ」を格助詞として理解するには日本語内では検証不可能であると考えられる。従って、村山説には賛成しがたい。

最後に村山のいうツングース諸語の同じような形態・統語の形式は類型論的類似性から来る形式ではなかろうかと考えるが、この点はツングース諸語内での形式なので、別途これからの課題として取り扱いたい。

注

- 1) 伊波普猷1943「古琉球」、池宮正治1995「混効験集の研究」、仲原善忠・外間守善1967「おもろさうし辞典・総索引」「混効験集」沖縄語辞典1983、沖縄古語大辞典1995、中本正智1976「琉球方言音韻の研究」、中本正智1983「琉球語彙史の研究」、内間直仁1984「琉球方言文法の研究」、内間直仁1994「琉球方言助詞と表現の研究」、和多田真一郎1997「沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究」、名嘉真三成1992「琉球方言の古層」、岩倉一郎1977「喜界島方言集」、仲宗根政善1983「今帰仁方言辞典」、平山照男・中本正智1964「琉球与那国方言の研究」、宮良当杜1966「八重山語彙」、下地一秋1979「宮古群島語辞典」

参考文献

- 飯田季治1936, 37, 38「日本書紀新講：上巻，中巻，下巻」明文社
池宮正治1995「混効験集の研究」，第一書房
伊波普猷1943「古琉球」，青磁社
岩倉一郎1977「喜界島方言集」，図書刊行会
内間直仁1984「琉球方言文法の研究」，笠間書院
内間直仁1994「琉球方言助詞と表現の研究」，武蔵野書院
大野晋，佐竹昭広，前田金五郎1981 岩波古語辞典，岩波書店
大野晋1977「音韻の変遷」，岩波講座日本語5 音韻，岩波書店
澤瀉久孝1982-1984「万葉集注釈I」
岸田武夫1998「国語音韻変化論」武蔵野書院
金子武雄1941「続日本紀宣命講」，白帝社
北原保雄，久保田淳，林大2001，日本国語大辞典，三省堂
下地一秋1979宮古群島語辞典，私家版
田井信之1979「日本語の語源」角川書店
仲宗根政善1983今帰仁方言辞典，角川書店
仲原善忠・外間守善1967「おもろさうし辞典・総索引」角川書店
名嘉真三成1992「琉球方言の古層」，第一書房
中本正智1976「琉球方言音韻の研究」，法政大学出版局
中本正智1983「琉球語彙史の研究」，三一書房
平山照男・中本正智1964「琉球与那国方言の研究」，東京堂
松岡静雄1962，新編日本古語辞典，刀江書院
松本克巳1995「古代日本語母音論」ひつじ書房
宮良当杜1966「八重山語彙」，東洋文庫
村山七郎1988「日本語の起源と語源」，三一書房
山田孝雄1908「日本文法論」
和多田真一郎1997「沖縄語の音声・音韻に関する歴史的研究」，武蔵野書院
国立国語研究所編1983，沖縄語辞典，大蔵省印刷局
沖縄古語大辞典編集委員会編1995，沖縄古語大辞典，角川書店
——，1957「古代歌謡集」，日本古典文学体系，岩波書店
——，1957-62「万葉集1～4」，日本古典文学体系，岩波書店
——，1958「古事記祝詞」，日本古典文学体系，岩波書店
——，1985，時代別古語辞典：上代編，三省堂